

小学校の全校児童より3倍多い…中山間地の子ども食堂に100人がやってくるわけ  
山あいの小規模校区でこそ切望される、子どもたちの居場所



岐阜県本巣市・外山地域で開かれる「コボちゃん食堂」の入り口（西瞭昭さん撮影）

入り口を彩るピンク色のガーランドをくぐるや否や、小学校低学年の男の子が「コボちゃん食堂大好きー！」と叫んだ。そして、問わず語りに「だって、友だちと遊べるから」。付き添ってきたお母さんも笑っていた。

「コボちゃん食堂」は、岐阜県本巣市北部の<sup>とやま</sup>外山地域でこの春始まった子ども・地域食堂だ。地域にある集会施設を会場に、4月以降月1回ペースで開かれている。食事作りは地域のお母さんたちが、受付やバックオフィス業務は私たち一般社団法人<sup>やまなび</sup>山学が、それぞれ完全ボランティアで受け持っている。

この外山地域は中山間地に位置する。小学校の全校児童は32人（2024年度）。そんな小規模校区で開く子ども・地域食堂は回を追うごとに来場者が増え、100人を超えた日もあった。少子高齢化が深刻な山あいにおいて、なぜ子どもたちをメインターゲットにした地域食堂を開いているのか。中山間地における地域食堂にはどんな存在意義があるのか。これまで半年間の運営経験をもとに考えた。



6回目のコボちゃん食堂で提供された手作りハンバーグ定食

#### ■入学式のない春に始まった

外山地域にある小学校はこの4月、入学式がなかった。新入生がいなかったからだ。小学校の「廃校」が、いよいよ現実味と危機感をもって語られるようになったタイミングと同時に、コボちゃん食堂はスタートした。

発起人は小学校の用務員さんや地域有志の方だった。過疎化に歯止めがかからない山あいにおいて、子どもたちと保護者にとっての居場所・交流の場を作りたい——。そんな思いが食堂という形で実現に至った。

食事の下ごしらは前日から始まる。食材調達や調理はすべて地域のお母さんらボランティアスタッフが担い、カレーの食材をカットしたり、ハンバーグをこねたりといった仕込みをするのが通例だ。当日もランチ提供に向けて朝8時半には会場入りして準備を始める。ただただ「地域の子どもたちに楽しい時間を過ごしてもらいたい」という思いで、連日調理場を動き回る。コボちゃん食堂はお母さんたちの思いこそが支えていると言っても過言ではない。



調理場で食事の準備をするボランティアスタッフのみなさん

#### ■運営を支える人たち「遠くまで行きたければ…」

資金面で見ても、コボちゃん食堂はかかわる人たちの思いで支えられていることがよくわかる。参加費は1人100円。これだけでは食材費を賄いきれない。その分、多くの方からの寄付によって成り立っている。企業など大口の寄付がメインではない。この食堂にかかわる多くの個人が、募金箱に寄付をしていってくれる。また夏からは、NPO法人「全国子ども食堂支援センターむすびえ」の助成も受けている。

寄付金だけではなく食材も、毎回、多くの個人が持ち込んでくれる。そのほとんどが、それぞれの家庭で育てたお米や野菜だ。これは田畑に囲まれた山あいの地域食堂ならではの利点かもしれない。「早く行きたければひとりで行け。遠くまで行きたければみんなで行け」。そんなアフリカのことわざを地で行くような食堂なのだ。

特にお米が顕著だが、食品を含め物価高が叫ばれる中にある。『食材高騰、コメ品薄 子ども食堂やフードバンク苦境 開催回数減少も』(北海道新聞デジタル、2024年9月21日)、『お米の「寄付」が減っている フードバンク、子ども食堂、困窮者への無料配布…品薄の影響が直撃した現場は』(東京新聞 TOKYO Web、2024年8月29日)といったように、メディアを通して全国の子どもの悲鳴が伝えられている。そんな局面だからこそ、地元農家さんらによる支援のありがたみをひしひしと感じる。

#### ■公園、駄菓子屋、お祭り会場…食堂が果たすさまざまな役割

4月に初めて開いたコボちゃん食堂には、地域の子や保護者を中心に56人が参加した。

食堂の案内チラシは本巢市の広報誌に折り込まれる形で地域内に配られ、地域住民や外山にゆかりのある人たちにも浸透してきている。次第に参加者は増え、7月の夏休みに開いた4回目の食堂には103人が参加した。



コボちゃん食堂でランチをとる参加者のみなさん

なぜ、子どもたちはこの食堂にやってくるのか。その理由は冒頭の少年の一言に尽きるのだろう。おいしい食事はもちろん、友だちと遊べて楽しいからだ。

ご飯を食べた後、そのまますぐに帰る子はまずいない。別室にはボードゲームやトランプが用意しており、小中学生が学年を超えて遊んでいる。校長先生がグランドゴルフの準備をしてくれたこともあった。地域の方がかき氷を作ってくれたこともあった。カエルの着ぐるみが登場したこともあった。食堂のサポートに来た大学生と追いかけっこが始まり、ゲラゲラと笑い合う姿もあった。毎回のように駄菓子を差し入れてくれる地域の方もいる。



食事後、トランプをして遊ぶ子たち



カエルの着ぐるみも登場し、食堂をにぎわせた

周囲を見渡してみれば、ここ外山地域には整備された公園がない。駄菓子屋もない。山あいで友だちの家が遠く、「近くに友だちがいなくて週末も遊べない」という子もいた。こうした地域で日常を過ごす子どもたちにとっては、コボちゃん食堂は公園であり、駄菓子屋であり、お祭り会場でもあるのだろう。

■子ども食堂は全国 9000 か所、中山間地こそ必要なわけ

むすびえによると、子ども食堂は全国約 9000 か所にまで広がっている。当初は生活困窮家庭への支援という側面で注目されたが、コボちゃん食堂がそうであるように、現在では地域コミュニティとしての役割に焦点が当たっている印象だ。

では、「中山間地のコミュニティ支援」というところまでよりクローズアップをしてみるとどうだろうか。

むすびえと株式会社ガッコムが提供する「こども食堂マップ」によれば、岐阜県下の子ども食堂は 157 か所（2023 年調査）ある。県内 42 市町村で子ども食堂がないとされる自治体は 8 市町村（美濃市、下呂市、垂井町、関ヶ原町、揖斐川町、七宗町、東白川村、白川村）。このうち美濃市と垂井町を除く 6 市町村が、過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法（過疎法）の定義に基づく「全部過疎自治体」にあたる。郡部ほど、子ども食堂という居場所が浸透していないと解釈できる。

岐阜県市町村・過疎自治体別「子ども食堂」と「15歳未満子ども」の数										
	全部過疎自治体				非過疎自治体	一部過疎自治体				
	市町村名	子ども食堂の数(か所)	15歳未満子どもの数(人)			市町村名	子ども食堂の数(か所)	15歳未満子どもの数(人)	市町村名	子ども食堂の数(か所)
全部過疎自治体	飛騨市	5	2,393	非過疎自治体	岐阜市	34	47,134	養老町	2	2,849
	郡上市	4	4,575		大垣市	8	20,388	垂井町	0	3,277
	下呂市	0	3,264		多治見市	11	12,280	神戸町	1	2,184
	関ヶ原町	0	590		美濃市	0	2,112	輪之内町	1	1,302
	揖斐川町	0	1,993		瑞浪市	1	4,187	安八町	2	1,879
	七宗町	0	283		羽島市	5	8,495	大野町	1	2,795
	八百津町	1	999		美濃加茂市	7	8,590	池田町	2	2,976
	白川町	1	586		土岐市	1	6,573	北方町	5	2,505
	東白川村	0	185		各務原市	10	18,863	坂祝町	1	1,048
	白川村	0	201		可児市	10	12,971	富加町	1	792
一部過疎自治体	高山市	15	10,554	瑞穂市	4	8,628	川辺町	1	1,239	
	関市	5	10,503	岐南町	5	3,776	御嵩町	3	2,092	
	中津川市	1	9,117	笠松町	1	2,743				
	恵那市	2	5,503	※表は筆者作成 ※子ども食堂の数は「ガッコム・むすびえ こども食堂マップ」 ( <a href="https://kodomoshokudo.gaccom.jp/">https://kodomoshokudo.gaccom.jp/</a> ) より ※子どもの数は令和2年国勢調査から。岐阜県オープンデータカタログサイト「市町村別の年齢（3区分）別人口及び割合（不詳補完値による。）」( <a href="https://gifu-opendata.pref.gifu.jp/dataset/c11111-154/resource/a8b06b2d-4e44-47ae-b673-decfee860f5c">https://gifu-opendata.pref.gifu.jp/dataset/c11111-154/resource/a8b06b2d-4e44-47ae-b673-decfee860f5c</a> ) より						
	山県市	4	2,616							
	本巣市	1	4,192							
	海津市	1	3,272							

(表) 岐阜県市町村・過疎自治体別「子ども食堂」と「15歳未満子ども」の数

子どもの数ベースで考えれば、すべからく食堂が都市部に集まる傾向にあるが、一方で、子ども食堂がない過疎の自治体がある現実も直視しなければならない。

とかく、費用対効果が叫ばれる時代だ。しかし、中山間地に費用対効果ばかりを求めると、もともとスケールメリットが乏しいだけにたちまち行き詰ってしまう。

中山間地は、子どもたちの居場所を欠いていると実感している。だからこそ、子ども食堂は大きな存在意義を持つのではないか。「地域の子どもたちのために」と汗を流すお母さんたちと、食事と遊びを満喫する子どもたちの笑顔があふれるコボちゃん食堂の様子を見ると、中山間地が明るくなるヒントがそこに転がっているように思う。